国立大学法人九州工業大学経営協議会議事要旨（平成３０年度第１回）

１．日　時　　平成３０年６月２１日（木）１３：００～１４：３７
２．場　所　　戸畑キャンパス　百周年中村記念館　特別会議室
３．出席者　　池上委員，井上委員，小笠原委員，北橋委員，高原委員，松岡委員
（五十音順）
学長，理事（教育・財務担当），理事（研究・産学連携担当），
理事（国際・評価担当），理事（総務・労務担当），
工学研究院長，情報工学研究院長，生命体工学研究科長
４．列席者　　羽野監事，副学長（学生・附属図書館担当），副学長（入試・広報担当），
副学長（男女共同参画・社会連携担当），教養教育院長

５．議長挨拶
議長から，開会にあたり挨拶があった。
引き続き,「２０１８年春，未来を想う」により，本学の近況について，報告があった。

６．会議成立
構成員１８名のところ，１４名の出席により定足数を満たしていることが確認された。

７．議事録の確認
平成２９年度第５回経営協議会（平成３０年３月１５日）の議事要旨の確認について説明があり，了承された。

８．審議事項
（１）平成２９年度決算について　　（資料２）
理事（教育・財務担当）から，決算に伴う貸借対照表及び損益計算書等の概要について説明があり，審議の結果，原案どおり了承され，役員会に付議することとした。

（２）平成３１年度予算にかかる概算要求について　　（資料３）
理事（教育・財務担当）から，本学における平成３１年度概算要求において，大学院工学府改組を通じた産学連携教育を創出するための予算を要求したい旨説明があり，審議の結果，原案どおり了承された。
なお，文科省へ提出するに当たって，文言の見直し等，若干の修正については学長に一任することで了承された。
なお，委員から次の意見があった。
（○：学外委員，△：学内委員）
○：　企業コンソーシアムや企業との共同研究は，どういった体制になっているか。
△：　企業との共同研究については，増加しつつある。共同研究に伴う研究者１人当たりの研究費受入額は，昨年度より増加している。

共同研究講座については，今時点で５件あり，戸畑ではパナソニック株式会社様と株式会社デンソー様の２つが設置されている。今年度中には，１０件程度になる予定である。産業界から本学への期待は，高くなってきていると感じている。

また，共同研究講座の場合は，共同研究が長期間・組織的に行うことができるため，産業界の方の協力は，強くなってきている。

（３）平成２９事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について

（資料４－１～２）

理事（国際・評価担当）から，平成２９事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について説明があり，審議の結果，原案どおり了承された。

なお，文科省へ提出するに当たって，文言の見直し等，若干の修正については学長に一任することで了承された。

また，委員から次の意見があった。

（○：学外委員，△：学内委員）

○：　スペースワールドで展示されていた月の石が，再度，ＮＡＳＡから貸与され,北九州市において展示できる予定である。月の石の展示場所は，まず，いのちのたび博物館，それから児童文化科学館（東田地区に移転予定）を予定している。プラネタリウムも予定しており，みんな宇宙の研究・開発に関心を持っている。

宇宙への夢や憧れがあるが，九州工業大学において宇宙への広がりを今後，更に期待してよいか。

△：　平成３０年４月から，工学部に宇宙システム工学科を設置し，本学としても，宇宙分野については注力していきたいと考えている。日本における宇宙産業はまだ大きくないので，宇宙産業並びに様々な企業に就職していくが，宇宙関連の教育及び研究に引き続き，更に推進していきたい。

特に，海外の衛星を打ち上げた実績のない国から，国連を通じて留学生を受け入れており，これも引き続き，推進していく。

また，小型衛星を今年も何台か打ち上げる予定であり，日本の大学における超小型衛星の打ち上げ実績については,日本トップクラスである。本学の地球低軌道環境観測衛星「てんこう」も平成３０年度に打ち上げ予定である。

○：　ジョイントリサーチプログラムは，どのような効果があるのか。国際共著論文が増えるなど，どういったジョイントの内容で，どういったことをやっているのか。

△：　２つの大学のうち，プトラ大学とはかなり以前より行っていたが，台湾科技大学に関しては，個別の教員同士の研究ではなく，持続的に大学の組織的な活動として定着させることを目的として行うこととなった。

非常に高い研究力を有している２つの大学と，連携協定を結んで，本

学としては研究の質の向上を目指している。

国際共著論文の引用数は，国内・学内だけの共同研究に比べると，高くなっている。本学の数値でみると，世界平均の引用数を上回っており，海外でも知られるようになってきている。

２つの大学のネットワークによって研究の成果が広まっており，研究の質自体も高まってきていると感じているので，今後も期待したい。

△：　組織対組織の動きでは，新しい動きが出てきている。台湾科技大学の今まで提携したことのない新しい分野の研究者との新しい組みあわせが生まれてきている。そういう新しい分野の開拓にも成果が出ている。

工学部１件，情報工学部２件及び生命体工学研究科１件の計４件が進んでいる。生命体工学研究科については，新しい分野を開拓し，全体的には，多岐に渡っている。

一方のプトラ大学とは，以前からの連携を更に，別のかたちでの広がりの成果が出てきている。

○：　洋上風力発電は，これから日本で開けようとしているが，九工大での動きはどうか。

△：　洋上風力発電は，裾野が広い産業と考えており，設置するためのいろんなかたちでお役に立てると思っているが，現在，日本のメーカーと協議を続けている状況である。北九州市も日本の産業の育成と近隣の産業の育成をキーワードに取り組んでおられると思うが，日本のメーカーが進出する中で，本学が技術的にサポートできればと検討を考えている。

○：　ドイツのアルファ・ヴェントス洋上風力発電所への視察や，台湾への視察を行い，夢と同時に，世界に遅れをとれない気持ちとなった。

いろんな北九州市の未来がある中で，洋上風力発電は，うまくいけば，大きなプロジェクトとなるので，産学官の連携を強め，九工大の力もお借りして進めていきたい。

△：　北九州市と北九州市立大学と連携して，協議を行っている状況であるので，今後ともよろしくお願いしたい。ドイツでは，風力関係で，学科を作ろうとの動きがあるが，日本の中ではそこまでの産業となっていないため，日本の大学で学部・学科を作るまでの話は進んでいないのが現状である。

△：　付帯技術という意味で，社会ロボット具現化センターにおいて，海中に沈んでいる部分に付着するフジツボ等を自動的に取り除くことができる船底清掃ロボットの開発を進めている。この技術を用いれば，船舶を大型のドックにいれて清掃するのに発生する莫大な費用を抑えることができるなど，実用化につながる技術を九工大は持っている。今持っている技術でお役に立てるはあると思うので，今後も北九州市と協力していきたい。

（４）経営協議会から選出する学長選考会議委員について　　（資料５）

総務課長から，学長選考会議規程及び構成員の申し合わせに基づき，経営協議会委員から委員を選出することについて説明があり，審議の結果，了承された。

９．報告事項

（１）経営協議会学外委員の意見を活用した法人運営の主な改善事例について（資料６）

学長から，経営協議会学外委員の意見を活用した法人運営の主な改善事例について報告があった。

１０．その他

（１）活動紹介　　（机上配付）

戸畑キャンパスにおける特色ある教育研究に取組む以下の教育職員から，自身の活動について説明があった。

①所　　属：工学研究院建設社会工学研究系建設社会工学部門

徳田　光弘　准教授

紹介内容：「北九州市への地域貢献・共同研究活動～ＳＤＭの取り組みを軸に～」

説明後、外部委員からは、次の意見等をいただいた。

（○：学外委員，△：学内委員等）

○：　ＳＤＭの企画は,学生自ら企画することもあるのは良い取組だと思う。取組は，何人で行うのか。

△：　２人１組で行ったりする場合もあるが，だいたい５人１組で行う。

○：　建物を改修する費用等は，いくらかかってどこから捻出しているのか。

△：　費用が一番難しい問題で，私が大学とは別に運営する法人において，費用を出している。法人にて負えるリスクについては，リスクを負って対応している。今回の実例は，法人が建物の所有者から賃貸しており，月の賃借料にて支払い等を行っている。

日々試行錯誤しながら，学ぶことは非常に大切で，学科では，基本的に建物を建てることを教育しているが，建てた後の事業の運営を学ぶことができる。

○：　全国的に，いわゆる空き家対策・所有者が不明な土地等が社会問題となっているが，今後同じような取組を広げていく予定か。

△：　空き家については，利用できるのならば，利用した方がよいと思っている。また，行政指導等の対策に乗り出しているが，行政と地域住民のサービスにおける授受関係がうまく行かなくなっていると思われる。

お金の授受関係を成立させることにより，地域の方々がエリアマネジメントを推進していけば，受け皿として，空き家対策となる。tobata cobaco でもそうだが，エリアマネジメントを行い，地域の当事者になること非常に大事であり，そのような実験であるので，展開されていけばよいと考えている。

○：　すばらしい取組であり，法人を他に持って，後援するような知恵もすばらしい。あえて応援のつもりで一言いうならば，学生にとっては，失敗することも勉強である。リスクはいろいろあると思うが，法人等でやっていると，どうしても，ある程度以上の冒険ができないのではないか。このプログラムは大学が運営しているからこそ，もう一段階大きなチャレンジ・異質なチャレンジができるようなかたちになれば，さらによい取組になるのではないか。

△：　失敗こそ学ぶことが重要なことは，認識しているが，責任の負える範囲でのチャレンジしかできないということは事実である。大学のフィールドを活かして，チャレンジできるフィールドを作ることが，今後できればよいと思っている。

なお，学長から，北九州市教育機関との連携等の交流状況についても，説明があった。

（２）平成３０年度経営協議会の開催日程について　　（資料７）

総務課長から，平成３０年度の経営協議会の開催日程について説明があった。